

山辺豊彦

構造の塾長なり

朝倉幸子◎TH-1

illustration: Taco◎Switch・エンタテインメント

■「大工塾」のご縁

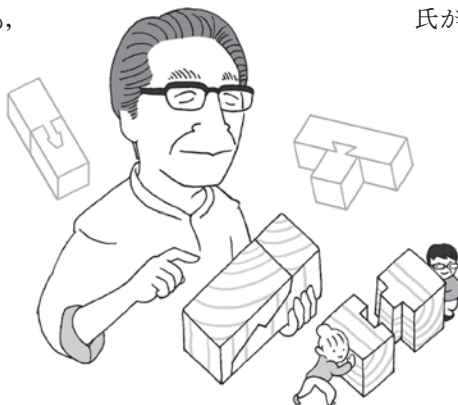
棟梁方が、経験と勘を「手板」に託して、それをたよりに家を建てていた。それもつい最近までだった。確認申請が変わった今では、それは通らない。構造家の山辺豊彦先生が、木構造に取り組んできたのはそれ以前から。きっかけは、「建築家の丹呉明恭さんに巻き込まれてね」と微笑む。実際に現場で造る大工さんを育てているグループの「大工塾」。その中心人物として活動する。

最初は「こいつをやり込めてやろう」との下心で大工たちが話す、仕口の種類も、ピンとこないくらいだった。棟梁がひれ伏して、信用されるまでの経緯は、劇画の世界だ。説得の方法は、擁壁を反力壁にして、借りてきたジャッキを使っての大きかりな「ぬき壁」の実験でありました。経験値から〇〇トンくらいだろうと言う相手に対して、計算上の数値と実際がドンピシャリと合った先生に軍配。大工対構造家が、決着を付けた場面が目に浮かびます。

「啓蒙運動になってきましたね」と、覇志堂が言う。一週間に3回もの講演会という。その優しい語り口で、真の木造の世界に引き込むのです。

■青木繁先生の門下生として

従兄弟さんの影響で、何となく建築を選んだそう。そしてこれも、誘われるままに入ったのが、建築研究会の構造グループ。構造家青木繁先生との出会いです。尊敬している川口衛先生とゼミの選択に悩みましたが、青木ゼミはシェル構造の実験的研究が多く、自分にあっていると感じたという。まわりに影響されて構造家になったようにおっ



しゃるが、実は計算があったのではないのでしょうか。そうえ、決めたら動かない信念の持ち主。31歳で独立してから、山手線某駅近くの一等地を拠点とし、今も14名の所員を従える事務所を経営する。木造の構造を主体に…？ ではない。木構造は全体の3割くらいで、「木造はどちらかというと奉仕ですよネエ」。それに、所員がなかなか辞めてくれなくてね、などとチャームングにおっしゃる。

残りたくて、残ることができる構造設計事務所。経営の手腕も講演依頼が来そうなくらい凄いです。

全国的に構造設計者を育てることが大事と、JSCAの活動にも積極的に取り組んでいる。目標の100人が終って、これからを模索中と。

■和水町立三加和小中学校

本誌2014年5月号の表紙は、インパクトのある屋内運動場の方杖を用いた架構形式の写真（撮影：大野繁）である。野沢正光建築工房・一字一級建築士事務所・UL設計室・東大森裕子時空間設計室の設計による、熊本県の木造の小中学校。その構造計画の勝因は、木を熟知している山辺先生が提案した、地場産材を選択したことからくるものだろう。試験体の作成や解体、大工さんへの手刻みの指導。そのすべてが、構造家としての熟練の技・知識・思考からきている。表紙にそのディティールを使ったセンスも、光っていますね。

■大工塾仕様の本

日本が誇る大工工事を残したい。大工さんを仕込みみたい。そんな気持ちを本にまとめたいという漠とした思いがあった。しかし、膨大すぎてまとめるのは難しいとも感じていたそう。が、ココでも先生を駆り出す「誰か」が何となく現れた。編集者の植久哲男

氏が「本をつくりましょう」とやって来たのです。そして、未来永劫に残る「大工の教科書」が見事にできたのでした。

趣味の版画をやっている暇も、収集したカメラをいじっている暇もなさそうですね。何処まで行っても、山辺豊彦先生は根っから、木構造塾長としての大きなお役目を担っているようです。